



「34年半の獄窓生活のなかで、私が手を握って死刑台に送った人々は70人くらいだと思う。昨日も今日も、というときもあったし、1日に2人ということもあった。死刑台に多くの人を見送ったの結論は、やはり死刑はあってはならぬ、いうこと。国家による殺人は、あまりにも残酷だ」

1993年に公開されたドキュメンタリー映画『獄中の生』（小池征人監督）を存じでしょう。死刑制度とは何か、獄中生活とはどんなものかを、これほど赤裸々に綴った作品を私は他に知りません。誤認逮捕から34年半、死刑判決から31年7カ月。自白の強要、アリバイ潰し、暴力、強迫、ずさんな違法捜査。この人が諦めず闘ったことにより、私達は多くの現実を

184 免田栄



長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「死刑台からの生還者」。日本で初めて死刑から再審無罪となった免田栄さんが11月5日、福岡県大牟田市で亡くなりました。享年95。死因は老衰との発表です。わが国の平均寿命は男性81歳、女性87歳。誤認逮捕から死刑を宣告された人が平均寿命を超え天寿を全うしたと書けば、麗しい話に聞こえるかもしれませんが、しかし、拘留された23歳から釈放された57歳までの奪われた時間を想うと、大往生を寿ぐ前に涙が溢れます。ただ、免田さんがここまで長生きできたのは、妻・玉枝さんの存在があったからこそ。

最期は孤独ではなかった

「死刑台からの生還者」夫婦二人三脚で戦い

玉枝さんが免田栄さんと出会ったのは、再審無罪を勝ち取った年。家族や親族が大反対するなか、翌年には結婚を決めました。新婚当初は栄さんの精神状態も不安定で、「同情で俺と結婚をしたのか」などとなじられ

た日もあったといえます。しかし結婚生活を続けるうち、栄さんはどんどん穏やかになっていきました。

おおらかな性格の玉枝さんは、心無い人からの嫌がらせや差別があっても、結婚を後悔したことはなく、夫婦二人三脚で死刑廃止運動を続けてこられました。栄さんは、どれほど心強かったことでしょうか。

3年前から栄さんは歩行が困難となつて、高齢者施設に入所。玉枝さんも同じ施設で暮らすことを決めたそうです。もしも施設に同居していなければ、コロナ禍で面会もままならず、夫の最期に立ち会えなかったかもしれません。長い間獄中で孤独と闘った栄さんが、最期は孤独でなかったことに安堵しました。

亡くなる直前まで大好きなビールを口にされていたとか。「息苦しい様子もなく、今にも起きてきそうだった」と語る玉枝さんは、これからも死刑廃止運動を続ける決意を語っています。